

けることすら億劫がられた博士のみを知る人には、假令普通でも面倒多い旅の中に、こんな雑役にまで孜々として従事せられた有様は一寸想像出来ないことであらう。當時この大量寫眞のことが滿洲の新聞に傳へられ、事業の終り頃に續々と參觀人がやつて來たが、その中の或る陸軍の高官は、「こんな事は誰かにやらせて、宿舍に休んで居られたらよいだらう、學者の自からする仕事ではないやうだ」というた。誠に一應尤も至極で、局外から見ればこゝろも考へられたであらう。博士といへどもそれ位のことは聞くまでもなく承知して居られたに違ないが、敢て自から之に當られたのは、かゝる事情の下に於ける史料採訪に従事したものに於て初めて領會出来ることであつて、漫りに外間の批評を許さないものがある。第一にはこれを撮影するを許されるに至つた事情を顧慮せられ、慎重なる處置に出られたに違ない。次には萬一脱漏等のあつた場合、これを補ふことが殆んど不可能であると考へられたにも由るであらう。またかくして一枚一枚と自からはぐつて、鮮やかにその記憶を残して、寫眞では得ることの出来ない原本の印象を留めて置かうとも考へられたであらう。更にまた甚だ實際的な説明を附加して置かなければならぬのは、當時かゝる事業に支出せられた金額は實に僅少であつて、今日の状態に勿論尙ほ不自由を訴へられるにしても、比較にならぬ。實にこの事業の爲にも、博士の英斷で或る方面から一時借金をして費用の不足を辨じたのであつた。従つて費用の點からも、漫りにこれを他人に一任することも出来なかつた譯である。要するにこれ等兩書の將來については、簡単に概略を述べても上の如く、平生無精に見えた博士の仕事として、一寸信じられない程の苦心と活動とが演じられたものである。

博士の史料蒐集に熱心であつたことは概ねこの類であるが、數度の奉天旅行に於て、いつも必ず何かの貴重な新